

M・シュマウス先生を悼む

加藤 信 朗

昨1993年12月8日、M・シュマウス先生はその96歳の生涯を終えられた。謹んで哀悼の心をお捧げしたい。

先生が日本を訪れたのは1959年春、今をさる35年前のことであった。折しも本中世哲学会は創立より7年を経て、揺籃期から青少年期に向かい、学会の研究活動もいよいよ本格化しようとする時であった。日本の中世哲学研究者すべての尊敬を集めていたM・グループマンの弟子であり、後継者でもある先生の来日は大きなインパクトを与えた。上智大学での中世写本研究セミナー、上智、慶応、聖心、早稲田、南山、京都、同志社など諸大学での講演と、先生は精力的に活動された。しかし、若い私たちにとって何よりも大きな意味があったのは先生の人柄に身近に触れ得たことであった。学問への謙虚な献身、勤勉な研究生活からにじみ出る一種の厳しさがすべてを包容する先生の温顔から溢れていた。“repetitio est magister omnium studiorum.”、写本セミナーの一隅に列席しえた私の耳に優しく論ず先生の声が今もそのまま残っている。先生の御好意にすがってその後多数の本学会員がグループマン研究所を訪れ、私たちは長くその恩恵に浴してきた。あらためて先生の御霊前に心から感謝の言葉を申し上げたい。

同時に、その時私たちの心を強く捉えたものはその頃一つの円熟期を迎えられ、新しく大きく広がろうとしていた先生の学問そのもの、すなわち、神学の新しい姿ではなかったろうか。来日中、本学会員を前に慶応大学でなさった講演原稿『トマス・アクイナスとボナヴェントゥラの哲学の神学的背景』（『中世思想研究』Vol. II, 1959, 所収）をいま目にしながら、あらためてそれを思う。

よく知られるように、先生の業績は学位論文「聖アウグスティヌスの魂論

的三位一体論 (*Die psychologische Trinitätslehre des hl. Augustinus*, 1924) に始まっていた。それは神学の最終の問題についてアウグスティヌスの主著を素材にしてなされた文献学と神学の稀有な結合の範型であった。忠実な教理史研究に裏打ちされた神学思弁の彫琢が先生の学問の基本的的方法論であり、それが先生の神学の形を作った。主著「カトリック教理学 (*Katholische Dogmatik*, 1937-61)」はこの方法によって貫かれており、信仰と神学の一致、教義の連続性の証明にシュマウス神学の特性があるといわれる。それは今世紀初頭の精神状況を支配していた、新カント主義、新スコラ主義というどこかでつながる二つの思想における理性の硬直化の底を破り、哲学と神学が互いに交流しつつ一つの生命を作り出してゆく、信仰の生命の咀嚼としての神学の回復であった。「信仰の理解」という教父の道もそこにあった。トマス・アクィナスとボナヴェントゥラおよびフランシスコ会学派を対比し、トマス神学に対してより批判的であった先生の態度もこの線に沿うものである。それはトミズム一辺倒の当時としては革新的であり、そこから、第二バチカン公会議の精神も準備されていった。この方向への先生の神学の熟成の兆しが来日の頃から準備されていたこと、また諸宗教の一致という理念がこの頃から先生の中で形をとり始めていたことを思う時、愛弟子ゴスマン先生の仲立ちで成り立った先生と日本との出会いも不思議な撰理的出来事と思える。いまヨーロッパの神学がどのような形をとりつつあるのか知らない。しかし、先生の方向は、今も私たちの向かうべき方向を示しているのではないだろうか。シュマウス先生の業績があらためて我が国の研究者によって回顧され、咀嚼されてよいと思うのである (cf. Bibliographie Michael Schmaus in *Wahrheit und Verkündigung*, München-Paderborn-Wien 1967, Bd. I, XXI-XXXIII; Richard Heinzmann, *Die Identität des Christentums im Umbruch des 20. Jahrhunderts: Michael Schmaus zum 90. Geburtstag*, *Münchener Theologische Zeitschrift*, 1987, 114-133). 墓所はミュンヘン、ワルトフリートホーフにある。